WEP 俳句通信

ウエップ俳句通信 VOL.70

特別作品25句●今瀬剛一「待秋抄」

特集●〈写生〉の現在

写生の現在―総論として―／中山世一
写生句における写生趣味と空想趣味／坊城俊樹
見ながら感じる、感じながら見る／井上康明
自分らしい写生句を求めて／森田純一郎
「生（いのち）」を「写（あらわす）」／深谷雄大
自然詠と写生／前澤宏光
詩心と写生／星野高士
わが写生・わが写生句／岸原清行
「写生」それは物体と情景／源　鬼彦

青山 丈100句●「一夏（ひとなつ）」

【短期集中連載②・新作30句】
柳生正名「水漬かざる」

【実力作家20句】
小島千架子「秋深む」

【特別寄稿】
西池冬扇　「冷たい具象」と「熱い具象」

【鑑賞】
吉岡桂六第５句集『筑波嶺』を読む
西池冬扇・土肥あき子・吉岡桂六

●好評エッセイ●
先人に学ぶ俳句「阿波野青畝(4)」岸本尚毅
戦後の俳人たち「大野林火」松岡ひでたか
虚子の肖像「虚子追悼座談会」坊城俊樹
楸邨を求めて「加藤楸邨の受洗」神田ひろみ
飯田龍太は森である「森を為す」清水青風
誓子の素粒子「誓子を出でて誓子に帰る」品川鈴子

●作品●
神蔵　器・雨宮抱星・須原和男・
松尾隆信・中根唯生・池田啓三・
藤田枕流・山崎房子・酒井弘司・
杉本千代子・小泉小泉・斎藤信義ほか

書斎にて

遠山陽子

待秋抄

今瀬剛一

苔の花倒木はもう沼のもの

風の来る方に瀧あり飛沫きけり

涼風の中心に瀧落ちてをり

水底に沈めて洗ふ硯なり

生きのびし思ひ蓮飯を食へり

白紙まだ白紙のままに油蟬

特集
〈写生〉の現在

〈写生〉あるいは〈写生句〉といってもさまざまな理解、さまざまな句があるようです。そこで、中山世一氏に総論としての一文をお願いし、自分は現在〈写生〉をどう考え、どのような〈写生句〉を作っているかについて〈わが写生・わが写生句〉というテーマで8人の作家にお書きいただきました。

写生の現在―総論として―

中山世一

〔はじめに〕

「写生」という言葉は俳句の世界で実に多く使われている。しかし使う人によりその内容が異なるため非常に分かりにくい実態となっている。

それでも写生は多くの俳人によって体験もしくは経験が重ねられており、俳句を作る上で大きな影響力を持っている。

なぜ写生は根強く生き残っているのであろうか。そこには根本的な大事なものが潜んでいるのではないだろうか。

〔写生とは〕

写生についてさらに考察を深めてゆきたい。そして現在の俳句界の写生の実態を見てみたい。

その前にやはり写生の定義に迫っておくべきであろう。先人たちの言葉などをもう一度振り返りながら考えてみよう。

(1) 子規の写生

すでに周知の通り、正岡子規は短歌・俳句における写生の提唱者であった。西洋画に影響されて思いついたといわれている。その子規は写生をどう考えていたのだろうか。

初め主観的なりし者漸く変じて客観的に傾けり。更に詳に言へば初めは自己の美と感じたる事物を現さんとすると共に自己の感じたる結果をも現さんとしたるを終には自己の感じたる結果を現すことの蛇足なるを知り単に美と感ぜしめたる客観の事物許りを現すに至りたるなり。例へば初めは山あり河あり最と美しと言ひしを後には最と美しといふ主観的の語を省き其代りに更に山河の他の美なる部分を現し美と言はずして其句を見る者に美と感ぜしめんと企つるなり。（「我が俳句」明・二十九年）

曾て見たる者を何時にても再び見せしむるも絵画の力なり、未だ見ざる所を実に見るが如く明瞭に見せしむるも絵画の力なり。写生の一点より論ずるも、絵画にして幾多の変化せる天然の美を容易に眼前に現出するの功あらば猶一美術として存すべきにあらずや。況んや純粋の写生にも猶多少の取捨選択あるをや。（略）

以上主として絵画に就きて論じたれども、俳句に於けるも司じ事なり。（略）